



「知っているものしか認識できない」 から脱するために

評者 西野徳之 総合南東北病院 消化器センター長

日常診療で腹部単純X線が使われる機会は、消化器内科においても減っているように思う。なぜだろうか？

それは、日本では手軽にCTを撮影できるからであろう。加えて、腹部単純X線の読影の仕方やその重要性が、大学教育も含め初期臨床研修でも十分に教えられていないからではなかろうか。腹部単純X線を撮影しても読影に自信がない、腹部CTを撮影するほうがよい、と考える方が多いのではないだろうか。しかし、CTは医療コストや放射線被曝量を考慮すると初診の患者すべてを撮影することはできないが、腹部単純X線ならすべての患者を撮影することも可能だ。

もちろん、腹部単純X線の読影に自信をもてるようになるには、勉強が必要である。多くの症例を読影しなければ、経験値は積めない。しかし、腹部単純X線は、非常に多くの情報を有している。その読影ができるだけで、患者の生命を救えることがあるのだ。その所見はfree airとniveauだけが所見ではないが、かといって〇〇signなどを覚える必要もない。腹部単純X線から患者の身体をみとおす「透視力」を磨くことこそ、腹部単純X線を撮影する意義なのである。

胸部疾患を想定する症例には、最初から胸部CTを撮影するのではなく、「胸部単純X線」と「心電図」を最初にとるのと同様に、腹部疾患を想定する際には、「腹部単純X線」と「超音波検査」を最初に行うべきである。腹部単純X線は意外に多くの情報を有しているからである。超音波はプローブを当てた部位しか診断できないが、腹部単純X線は腹部全体を俯瞰できることが利点だ。

そもそも画像診断は、見えて初めて診断されるものである。かつて、米国の放射線医 Merrill Clary Sosman (1890-1959) が「In all roentgenology, we see only what we look for, and we recognize only what we know (X線読影において、われわれは探しているものだけを見て、知っているものしか認識しない)」と言ったように、画像診断は主観的で経験値に左右されることが多い。指導医は、それをいかに客観的に体系化し教えられるか、ということが目標となる。

本書は、これらの点を踏まえ、腹部単純X線をいかに理解すべきかを図示し、解説している。異常を色づけたカラー写真とオリジナル写真の2枚を並べて掲載している点がユニークだ。構成は、画像を中心に「見えるもの」をいかに理解すべきかに腐心し、腹部単純X線のもつ可能性を説いている。

腹部単純X線の初学者や医学生・研修医にも読みやすい本となっているように思う。一度手に取ってご覧いただくことをお勧めする。ちなみに、評者は『ココまで読める！ 実践腹部単純X線診断—「透視力」を鍛えて「臨床推論」能力を高める』（中外医学社、第2版；2015）を上梓している。これは、本書の上級編にあたる本である。本書を通して腹部単純X線の読影に興味を抱かれた読者は、ぜひ一度ページをめくってほしい。きっと、さらなる腹部単純X線の奥深い境地を堪能できることであろう。

G



腹部単純X線写真 の見かた ABCDE

2枚並べてわかる読影の基本

Christopher Clarke、

Anthony Dux=著

小橋由紋子=訳

定価：本体 4,200 円＋税

B5 変・136 頁／MEDSi／2019

[ISBN978-4-8157-0170-3]